海の記憶

岡野薫子 文　須田 寿

著者紹介

岡野薫子（おかの　かおるこ）

1929年東京生まれ。東京農業教育専門学校付設女子部卒業。科学映画のシナリオ執筆を経て、児童文学の創作活動にはいる。主な著書に、『銀色ラッコのなみだ』(実業之日本社)、『ミドリがひろったふしぎなかさ』、『アナグマたちの夜』(以上童心社)、などあり、数かずの賞を受賞している。

須田寿（すだ　ひさし）

1906年東京生まれ。東京美術学校卒業。帝展、新文展を経て、1941年創元会に参加。退会後、牛島憲之らと立軌会を創立。1957年鹿沼市庁舎の壁画制作。1977年自選展を開催。現在、武蔵野美術大学名誉教授。

海の記憶

昭和54年7月25日初版発行

文・岡野薫子 ©
画・須田　寿 ©

発行所・株式会社 **童　心　社**

東京都新宿区三栄町22

電話（357）4181

振替　東京1-75504

写真植字・東京光画株式会社

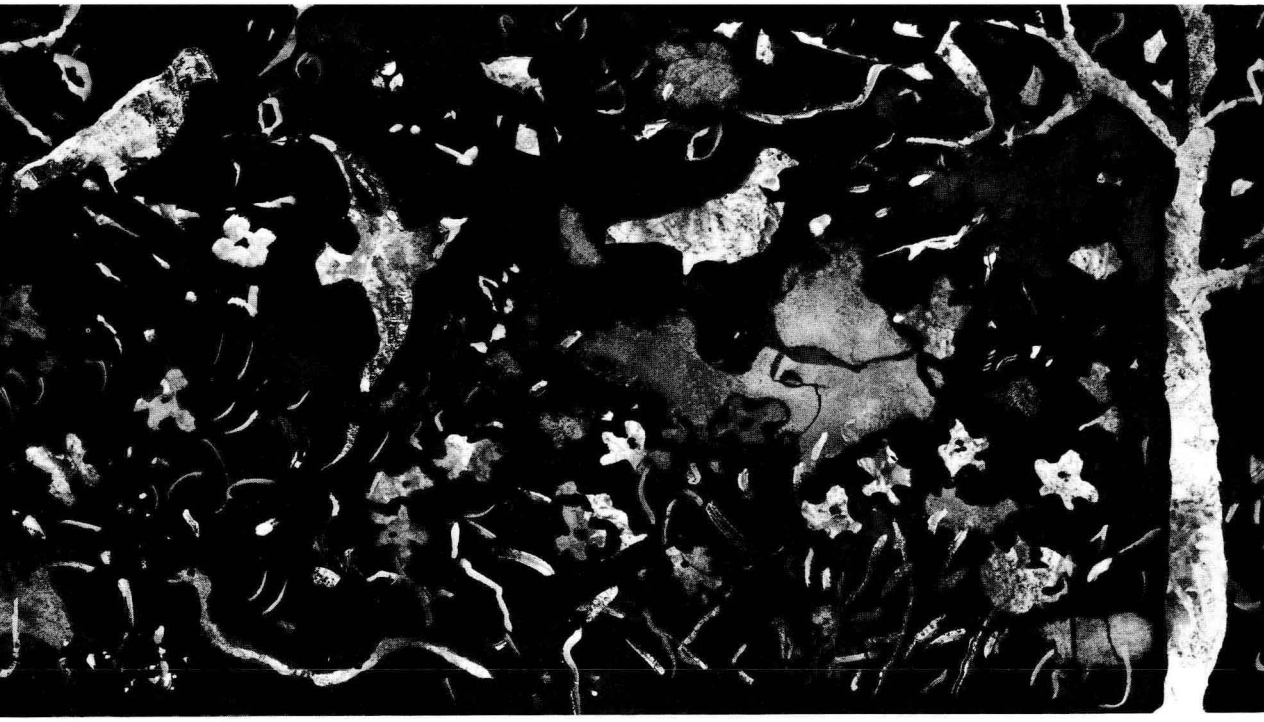
製版・印刷・小宮山印刷株式会社

製本・株式会社 難波製本

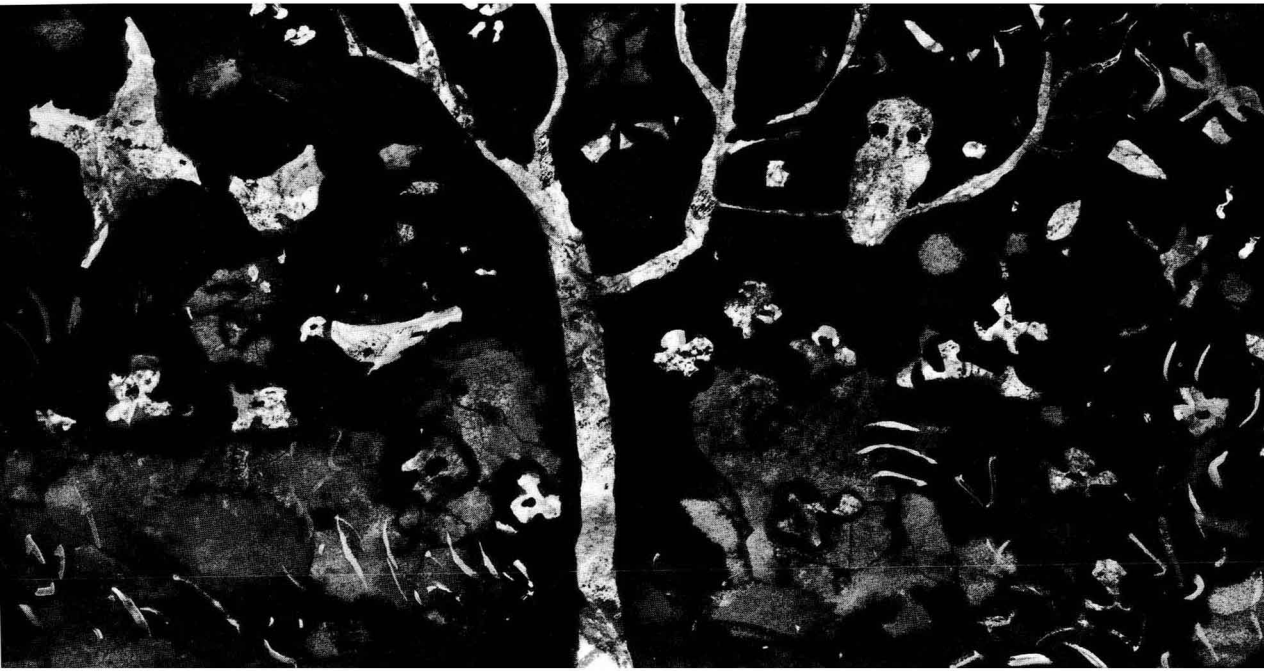
B5変型・21cm・96P・NDC 914.6

0395－780183－5253

『海の記憶』は、子どものころの記憶につながる。
海や山や、また町で、人とふれあい、自然とふれあい、その
おりおりに胸にのこった、これは、私の心のアルバムである。



童心社



海の記憶

岡野薫子 文　　須田

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

もくじ

海の記憶　7

螢　15

ももいろのひよこ　23

グミの実　31

桜二題　39
紅葉がきれいに仕上がるときは……　47
星とコスモス　55
ネコと私と文学と　63
月見草が咲いていた……　73
古い家　79
あとがき　93

海の記憶

海について、私は切れ切れの記憶しかもっていない。子どものころに初めて見た海は、神奈川の茅ヶ崎の海だった。茅ヶ崎に、南湖院（なんこいん）という結核療養所があり、そこに父が入院していた。母につれられて、私はたびたび父に会いにいった。病院の庭からもう、砂地になっていて、海岸近くまで、見事な松林がつづいていた。かたいはずの地面が、さらさらした砂であるのが珍しく、なにか奇妙な感じがしたものだ。靴のなかにすぐはいってくる砂が気持わるかった。

病院からの帰りみち、砂浜で貝殻をひろうのが、私の大きな楽しみだった。消毒と病人のにおいに満ちた建物から外にでると、目の前には、こい藍色の海がひろがり、砂浜には、白いレースのような波が、よせては返していた。真夏の八月というのに、水泳をしている人もだれもいない、静かな海だった。

広い砂浜に、若い母親と小さな女の子のふたりだけの光景は、思い浮かべただけでも、寂しく悲しい。しかし、その時、小さな女の子だった私は、母の気持をよそに、ただ、貝殻ひろいがおもしろくてならなかった。銀色の砂のなかから、淡いピンクの

二枚貝の片われや、きれいな巻貝を見つけだすのは、まるで宝探しのようで、胸をどきどきさせたものだ。

都会育ちで、泳ぎは危ないからと、親にとめられ、海水浴にもいったことのなかった私が、初めて海にはいったのは、もう、かなりな年齢になってからだった。

そろそろ土用波のくるころで、海の家にもひと気はなく、そこの小学生が、片すみのテーブルで、夏休みの宿題をやっていたりした。それでも、浜にでてみると、若者たちが波のりに興じていたり、また、ゴムボートに、のんびりよこになっている女の人がいたり……、のこり少ない夏を楽しんでいる人びとの姿が、あちこちに見られた。

私は、友だちからかりた浮き輪をからだにくぐらせると、そろそろ海にはいっていった。すると、ひとりでに足は底からはなれ、からだは浮きあがった。波のうねりがなめらかに皮膚にまつわる感じが、いかにも親しげに私を迎えてくれたようで嬉しかった。

(海を泳ぐって、空を飛ぶのと似ているんじゃないかしら)

ふと、そんな思いが、頭のなかをよぎった。

(空を飛ぶ鳥たちのように、魚たちは青い海を飛んでいる……)

人間が、もし、自分の力で空を飛べたら、その感じは、海を泳ぐときとそっくりな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

のではないか――と、今でも時どき、そんなことを思う。

海の標識である燈台を映画にとろう、ということで、暇さえあれば燈台めぐりをしていた時期があった。御前崎、石廊崎、伊良湖岬、鳥羽、初島――と、いろいろまわって歩いたなかで、最も劇的な印象で私の心をとらえたのは、伊良湖岬の無人燈台であった。

秋の夕暮れ、伊良湖石門でバスをおりた私は、燈台まで二キロはあるという道を、いそぎ足に歩いていった。白く乾いた道すじがゆるやかに起伏し、ところどころ道の片側が地すべりしたところでは、海がはるか眼下に見おろせる。白い波頭が競争で走っていくのが、まるでイルカの群のようだった。水平線の彼方はまばゆく光り輝いて、太陽はすでに西の空に沈みかけていた。

燈台まで、まだ、よほどの道のりがあるのだろうか――と、私はようやく心細くなりかけていた。しかし、下の海を見おろそうとした、その時、岬の突端にそそり立つ燈台に、突然、視界はさえぎられた。

私は思わず、息をのんだ。

海岸は、ごろごろした大きな石が積み重なり、その突端に、無人燈台は、野性的なあらあらしさを見せて立っていたのであった。

太陽はきららかに輝きながら、しだいに空を染めかえ、水平線には茜色の帯がかかった。——と、燈器に明りがともり、自動的に点滅をはじめた。光の輪が岩壁に映えて、一瞬、あたりはほの明るくなると、ふたたび、夕暮れのとばりのなかに、吸いこまれるように消えてしまう。北風がはげしく吹き、猛りたつ波はうねり、よせては岩に砕けてとどろく。

向いに黒ぐろとよこたわる神島（かみしま）の、山の中腹でも、燈台の光が明滅する。チカリと光っては尾をひくように消えて、また鋭くチカリと光る。

薄墨色の中央に、星がふたつ——。そして、マストに高く緑や赤の標識ランプをともした船が、波浪のなかをゆっくりと滑るように進んでいく。それまで何も見えなかった海に、いつのまにか、大きな船が二、三、影のように姿を現わし、去っていった。

船員たちは、燈台の光を認め、海図をひいているのだろうか。港の近いことを知り、ほっとした表情を浮かべているのだろうか。無線は船に正しい方角を教えるけれど、それだけでは心の安心感は得られない——と、そういった、御前崎の燈台の所長の話を、私は思いだしていた。

『自分の目で、実際に燈台の光を見た時の安心感は、何ものにもかえがたいですからね。光を見たということは、そこに陸地があるということなのですから……』

その昔、方角を見失って海上に漂泊した船が、遠くの明りに導かれて、無事陸地に

ついたという話は、いくつとなく伝わっている。霊火が船を導いたとして、古(いにしえ)の素朴な人たちは、そこに神社を祀り、出航の平安を祈願したのだ。

風の音と波の音のみがとりまくなかに、私は立っていた。漆黒の限りない空のひろがりに、無数の星がちりばめられ、その下で、キラリと光る束を海へ投げる。凝縮した時間のなかで、それらは見事に調和し、緊張した美しさをつくりだしている。あまさの微塵もない、硬質の響きをもったひとつの世界が、そこにはあった。

海について、私は切れ切れの記憶しかもっていない。しかし、その海を思い浮かべるとき、心はときはなたれ、大きな息をしたくなる。だれしも、きっと同じだろう。それは、海が無限のものとして目に映るからだ。ある意味では、山とは全く対照的だ。窓の外にいつも海がある——というような海辺の生活を私は知らないけれど、そうした生活に、人生の途中からはいっていくとしたら、若いうちに限られるのではないかという気がする。海の厳しさは、山の厳しさとは全く違ったものだろう。私にとっての海は、これからも、旅先でめぐり会うおりおりの海——ということになりそうである。

螢

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com